

セッション1

がん患者のセクシュアリティ・ケアと看護： 現場の実践から学ぶ

高橋 都¹⁾、野口理恵²⁾、三木佳子³⁾

1) 東京大学大学院医学系研究科、2) 国立病院機構九州がんセンター、3) 香川県立中央病院

1. 性(セクシュアリティ)のケア：いつ、誰が、どのように？

近年、がん治療を受ける人のQOLの一側面として、性(セクシュアリティ)が注目されています。治療の進歩にともない、がんと診断されても活発な社会生活を長く送る人は着実に増加しており、疾患が完治する可能性もあります。命にかかわる病気になったとしても「自分らしい暮らしを送りたい」と考えることは当然であり、それには性生活も含まれます。性は人間の暮らしの大切な一部分であり、実際、医療者は患者から率直な性の悩みを打ち明けられることもあります。特に看護師は、家族関係や暮らしに密着した性の相談を受けることが少なくありません。しかし「質問に正しく答えられるだろうか」「落ち着いて性の話ができるだろうか」と戸惑う声も聞かれます。さらに、「困っていきそうな患者さんに、こちらから性のことを聞いてもいいのだろうか」「性の話を持ち出すのは失礼ではないか」という心配もあります。がん患者の家族関係やカップル関係全体を看護ケアの視野に入れるとき、性というデリケートな問題に、いつ・誰が・どこで・どのように対応するべきなのか、多くの看護師が考えあぐねているのではないのでしょうか。

このテーマセッションでは、多忙な臨床現場で働く看護師が、無理なく効果的に患者の性を支援するための方策について、会場全体でざっくばらんに話し合います。まず、がん患者と性に関する国内外の研究を概観し、特に日本の臨床現場における「患者の性」の位置づけを考えます。次に、一般医療者が段階的にセクシュアリティ・ケアを行うための基本的な考え方(PLISSITモデル、Annon)と、臨床現場でも活用できる性関連の資料や研修会などを紹介します。そして、性に対する取り組みを始めている国内の二つの病院から、それぞれの実践についてご発表いただきます。

2. セクシュアリティ・ケアの実践紹介

具体的な実践例として、国立病院機構九州がんセンター看護部の乳がん病棟における取り組みと、香川県立中央病院看護部ストーマ外来をご紹介します。いずれも主に女性患者に対して、その性の悩みにも積極的に取り組んでいます。実際の相談内容、対応に伴う困難や工夫点、院内の他の医療者との連携などについて、試行錯誤のプロセスも含めて現状をご報告いただきます。

3. 討論したいこと

- ・一般医療者が患者の性をどのように支援できるか？
- ・パートナーにはどのように働きかけたらよいか？
- ・性に関わるケアを、ケア全体の中でどのように位置づけたらよいか？
- ・より深く学ぶためのリソースにはどのようなものがあるか？

実践例にふれ、他の参加者と話し合い、ご自身が働く臨床現場で実践の第一歩を踏み出していきたいと思えます。多くの皆様のご参加をお待ちします。